

## 巻 頭 言

節分、立春を迎え、キャンパス内の梅も開花し、ようやく春が近づいてきたことが感じられる陽気になってきた。学内も期末試験や卒業式の準備が始まり、例年のことながら年度末の慌ただしいシーズンに入りかけている。

さて、本号は今年度の最終の「学苑」となる。執筆者の中には、今年度の研究のまとめとして投稿された方もおられると思う。本誌に掲載される論文は全て、編集委員会の査読を経て、掲載されている。学内の教職員や研究者によって学科を問わず投稿された報文が編集されているため、論じられている研究の分野も多様であり、掲載された研究報告あるいは論文等の記述様式、論じ方は分野によって様々であることは、読んでいていつもつくづく実感することである。

執筆者が本誌に投稿する理由もおそらく分野によって、または人によって異なる。論文を投稿できる適切な学外学術論文誌が少ないため、あるいは研究が完成すれば学会誌に投稿したり書籍にまとめる計画だがその中間的な段階として報告するためなどが理由だろう。先述のように、本誌は査読審査を経ての掲載となるが、必ずしも投稿された報文の研究分野に精通した方が査読を担当するわけではないため、研究内容に深く踏み込むことは分野によっては難しいこともある。従って、学内研究者にとって本誌は、学外学術論文誌に比し気軽に投稿できる反面、投稿論文は研究業績としてやや軽く受け取られる場合もあるだろう。

「学苑」の意義を改めて考えると、まず、研究成果を大学として公表できる手段の一つであることにある。従って学内の研究の内容および水準を如実に反映するものであり、学内で行われている研究の象徴ともいえる。また、この紀要の出版によって学内の研究を促進する効果も期待される。

本学の教職員の多くは、タイトルに関心がある、仲間が執筆者である、自分の分野に近いなどの理由で、本誌のなかの論文を選んで読まれていると思う。他方、執筆者も学内の全員が読んでいるわけではないことを認識しているが、侮ることはできない。留意したいことは、本誌は毎号 400 部近くが内外の国公立図書館、大学付属図書館に配布されているという点である。多くの研究者が比較的容易に手に取って読める学術機関誌である本誌のなかに掲載されている研究成果や持論は、世の中に広く公表されていることになる。従って、学外の権威ある学術論文誌に投稿する前の中間報告でも、あるいはりっぱな書籍にする前の各論的な内容でも、この内容が学術研究報文として公表することに意義があるものであり、一定の学術的水準を保っていることが必要であることを今一度、共通の認識として確認したい。そして、本誌への投稿を足がかりとして研究成果を開花させ、是非学外の学術論文誌への投稿へつなげていっていただくことを期待する。

最後に、忙しい日常業務のなかでも研究をまとめ投稿された執筆者の皆さまに敬意を表し、感謝申し上げたい。

(小原 奈津子)